

1980 年代以降、発展途上国の中でもアジア諸国は経済を成長させた。それはなぜか？  
また世界銀行の政策についてが述べられている。

はじめに

1980 年代→アジアの時代と言われた

1997 年：アジア経済危機

1980 年代：東アジア諸国の高度成長



日本を模範とした

※日本の戦後復興には政府の役割 大きい

⇒日本の産業政策＝直接・間接的に政府が市場介入する

(例) 斜傾生産方式、産業合理化計画など

一方、東アジア以外の発展途上国は 1980 年代→経済停滞



自由競争 → 政府の役割 小さい

1990 年代：世界銀行→構造調整政策を反省

∴政府の役割を以前より評価する

### 1、構造調整政策による市場化

第 2 次石油危機→石油価格上昇→途上国に大幅な国際収支赤字

∴世界銀行は構造調整融資を開始

交換条件として融資を始める。  
条件  
＝コンディショナリティ

世界銀行や IMF による行き過ぎた自由化政策により、途上国に大きな影響与える

「ワシントン・コンセンサス」

- ① 為替レートの自由化②金利の自由化③貿易の自由化④外資の自由化
- ⑤民営化
- ⑥規制緩和⑦公共支出改革⑧税制改革⑨財政の自立⑩私的所有権の保持

●自由化＝市場メカニズムの導入・規制緩和

第1 為替レートの切り下げ

※途上国を国際化し、国際競争に組み込むために世界銀行が促進した政策

第2 金利政策

※実質金利をプラスにする政策

第3 統制価格の撤廃

…財・サービスの価格を自由化する

●構造調整融資の世界銀行モデル

$$GDP = \text{消費}(C) + \text{投資}(I) + \text{輸出}(X) - \text{輸入}(M)$$

$$ODA = \text{輸入} - \text{輸出}$$



限界輸入性向で決まる



小さくすると

国際収支の赤字 小さくなる

∴国民の輸入性向を下げるのが構造調整の大きな政策

2、「マーケット・フレンドリー」政策

世界銀行は市場競争促進するマーケットの機能を重視するための政府の役割を明かす



世界銀行の基本的な考え方

- ① マクロ経済の安定化
- ② 人的資本への投資
- ③ 対外市場の開放
- ④ 企業間競争を促進する環境の提供

「東アジアの奇跡」 ➡ 「基礎的な政策」と「選択的介入」政策

政策の有効性

- ① 特定産業育成政策⇒成功しなかった
- ② 政策金融⇒成功した場合もある
- ③ 輸出プッシュ戦略⇒基礎的政策と組み合わせると成功

市場に対する政府の役割を容認  
選択的介入政策が有効な場合もある